

北 辰 會 雜 誌

第 百 三 十 號

大 正 十 四 年 七 月

第 四 高 等 學 校 雜 誌 部

第四高等學校北辰會雜誌
大正十四年六月三十日納本
大正十四年七月五日發行
第百參號

第百三號 北辰會誌

二〇三高地	………	檜村實(一)
雀草	………	脇山康之助(三)
不景氣	………	太田辰夫(六)
五月の詩	………	瀬川重禮(六)
詩話會作品	………	(七)
いてふの丘	………	坂田精一(七)

編輯 後記

北辰會決算報告

創造は興奮を伴ふ。
分娩は自然法則から見れば
無理な状態である。

—— エルネスト・ルナン ——

二〇三高地

檉村 實

學校へ曲らうとする角で、彼は十分前の鐘を聞いた。
彼はホッとした様に思つたと同時に、何だか悲しくなつて、自然と歩調が小刻みになつて
來た。

息せわしく校庭に駆け込んだ時、「おや」と思つて立止つた。
いつもと空氣が違つて居た。まだ、あつちに一固り、こつちに一固りと、まるで亂雜に
皆は喋舌り、笑つて居たのであつた。彼は鐘の空聞きをしたのではないかと疑つた。彼は
手近の友達の肩に手をかけた。

「まだ、豫鈴は鳴らないのかい？」

「今鳴つた」手をかけられた男と、他の二三人が振り向いて、一しよに答へた。

「どうして並ばないんだ？」彼はかう云ひながら、校庭の隅にある號令臺に眼を投げた。「スッポンが居ないんだな」彼は思はず突拍子もない調子で叫んで、友達の肩を強くゆすぶった。「愉快だなあ」

「何するんだい」相手はよろめいてしかめ面をしながら云った。「そんなに嬉しいのか？」「前代未聞なもの」彼は尙も號令臺を見つめながら、こんな事迄答へた。

實際彼は嬉しかった。割合に無口な彼が、しばらく経つて、「今日は實に好い天氣だ。」とか、「愈々今日はゴーディアンノットを切る處を習ふんだね」等と、浮きくど喋舌り出した程であつた。

「そんなに嬉しいのか？」又一人が訊いた。彼は一寸顔を赤くして口籠つた。

「無理はないよ、怨敵なもの」一人が笑つた。

「あいつの爲に停學迄食つたんだものな。」他の一人が應援する様に口を入れた。

「そんなでもないさ」彼は恥し相に下を向いた。随分無駄だなど思つた。だが、文字通り喜ばしさが彼の姿を吸ひつくして居た。

x

彼は實際、スッポンといふ綽名をとつて居るその体操の教師が嫌ひだつた。何處といふ事なしに嫌だつた。いはば虫が好かないのであつた。別に、その日に焼けた頬骨の尖つた顔だとか、一分間に凡そ二十回も廻る眼だとかでもなく、たゞ彼がその中學校に入學して最初に見た瞬間から好意がもてないのであつた。しかも、却つて彼は彼の西洋人の様だといはれる一種特有な足の動かし方——膝を曲げないで歩行く——を、その教師から私かに學んだ程だつたのであるのに。

「之が性が合はないとでもいふんだらう」彼はいつもさう考へて居た。

「自分は源氏の子孫だといふから、あいつの先祖は確に平家に違ひない」等とも思つて自分の無稽な考へを笑つた事もあつた。

日數が経つにつれて、惡意を産む様になつて行つた。段々彼はその教師が受持つ体操の時間には出席しない様になつた。二年生になつてからは、顔を合はす事を恐れた。

教師の方でもそれを感じ出した。初めは、クラスでも上席に居る彼が、自分の時間だけ休むのを見て不思議に思つて居た。何かこの時間に限つて醫者にでも行くのであらう位に考へて居たが、ふと或る機會で缺課届を見て、それに腹痛だとか頭痛、神經衰弱症等の理由が書いてあるのを知つた。教師はその後殊更に彼を注意して見る様になつた。

或る春の暖い午後。

裏の芝生の土手で寝ころんで心ゆく迄小説を読む自分を描いて、ポケットに藏^{しま}つてある本をいぢりながら例の体操の時間の一寸前將に校門を出様とした。

「が、何といふ災だ」彼は突差に思ふた。

「おや、……………こゝだ……………」スッポンはかう緊張したに違ひない。ジロリと彼を流目に見たが、急いで眼をそらして步調をゆるめた。

彼には姿をかくす餘裕もなかつた。たしかに當惑した。だが、教師が一寸自分を見たなり眼を外^{ほか}にそらして了つたのを見て、殊更に變な氣持が頭をもたげた。

「先生！」思はず呼び止めた。

教師はバネ仕掛けの様に立止つた。

彼は勿論次ぐべき言葉を持つて居ない。

教師も豫期して居た様に口をつぐんでゐる。

二人の眼と眼との間には、地球儀の赤い赤道のラインの様なものが飛び出た。一寸した小道で小用をたしてゐる様な氣分が起つた。

次の刹那、エンゼルが舞ひ下りたと御互は感じた。二人は同時にその櫻の花びらに視線をうつした。瞬間、二人は御互に別々の明い光線を眼に感じる事が出来た。

暑い夏の日の休み時間。

生徒達は縁になつた木影で、弛みきつた身体を、仰向けに胸からのぞかせて居た。彼もその一人であつた。

スッポンがやつて來た。

「皆元氣がないぞ。暑さ等に負けてはいかん。鐵棒なり、飛臺なりで汗を充分出さなきゃ……………」スッポンはわざと彼を見ない様に務めて云ひ切つた。

「……………いかん。」教師は云ひ終ると徐ろに、手を後ろに組んで、のろい步調で歩行き出した。彼は後ろ姿を見て苦笑した。

手元にあつた小石を取りあげるや投げ付けた。すれ／＼に飛び過ぎた。

「よせ／＼」と皆が止めた。勿論彼にも、そんな事を續ける氣もなかつた。

教師はツト立止つた。彼はハツとした。

教師は他の生徒と話しをし出した。彼の方に脊を向けて。

「畜生、俺の負けだ——」彼は突差にそんな事を感じた。ふと、ポケットの握り拳に觸れたものがあつた。

彼は立ち上つた。

教師が兩手を舉げる。それを圍んだ生徒がごとく笑つた。

教師が片手を振り廻す。又生徒が笑つた。

彼はしのび足でスツポンの後ろに止つた。

「電車にひかれるなんて、餘程神經が鈍い。而もあんな大きな車体と轟音なのに。——一尺間があれば飛び退く事も出来る。——」

彼は、こんな事を耳に認めながら、教師の黒い洋服に、白いチョークでス、の字が書かれたのを見て微笑した。ツも出来た。やがて、白くスツ、ボンが浮かんだ。

彼は一步退いた。木の蔭で哄笑が一時に破裂した。教師はクルリと振り向いた。圍りの生徒が急に、クス／＼と笑つた。

教師は當惑げな、不快相な顔をして、急いで歩行き出した。哄笑や苦笑が運動場の生徒に順々と傳はつて行く。教師は小走りに姿を消した。

鐘が鳴つた。生徒は列を作つた。

教師が號令臺の上に姿を現はして、號令をかけた。各組が順々に動き出した。

教師が、動きかけた彼の處に、驅けて來た。顔が青く緊張して居る。

「お前——君だらう？」

「さうです。」

「一寸來給へ。」

「消したな——」誰かゞ云つた。

二人は無言の儘監督室迄行つた。

「なぜ、君はあんな惡戯をしたんだ。」

「無理な質問です」

「お前はわしを侮蔑する積りなのか」

「別に——」

「何だ貴様は——。生徒ぢやないか。」

教師の口元は引きつつて來た。監督や他の体操教官は各々下を向いてペンを握つたまゝ居る。

「謝罪せい——。謝らんか。——。未怖しい奴だ。先生方、こんな男です。」

他の教官達は一勢に振り向いた。

「謝罪せんのか」教師はボカリとなぐつた。續いてボカリ／＼とやつた。教官連はツト立上つた。監督が歩みよつた。

「謝れば許して下さるといふのだ。」

「意識してやつたんです。」

「強情な奴だ。」又なぐつた。蹴つた。「親爺でもなんでも呼んで来い。」

向ふ脛と、顔がヒリ／＼し出した。

「惡びれた風一つしませんね——。」こんな言葉を聞きながら、彼はそこを出た。

その明くる日から、彼は一週間學校へ出る事を禁せられた。

x

「して見ると、矢張り嬉しいのだな」さう思つた。「だが、スッポンが病氣？」

皆が動き始めた。教官の一人が號令臺に姿を見せた。

「是りや本物だ。」彼は心で叫んだ。

「實は——」ふと教官の言葉が傳はつた。

「長らく諸君の御面倒を見られたY先生は御高齢でもあり、且家庭の事情旁々職を、昨日限り退かれる事になつた。」

運動場がざわめき出した。口笛を吹いた者も居た。拍手した者もあつた。恐らく、彼も教官の次の大聲を聞かなかつた。足踏みをしたに違ひないのである。

「處で——。」教官は急に聲を張り上げた。そして、Y先生は、涙なくしては恐らく皆に別れの挨拶を爲し得ないであらうとの理由で、今朝も來られない事、故郷に引きこもる事、皆からの頼りを切に待つ事、等を雄辯に付け加へた。

「やめたとなると一寸氣の毒だね。」彼は隣りの男に云ひかけた。が、それが彼自身の耳に、ひびく嘲笑的に響いた。

「生一本な、眞面目な先生だつたが——。」二、三間さきで、こんな言葉が鋭く彼の耳をついた。

その後、勿論彼は体操の時間を休む必要がなくなつた。平易な十日が過ぎた。又別に、スッポンの事を思ひ出す事もなかつた。

「箱庭はどうだい？」彼は突然に提議した。

「どんな意味でだい」彼は訊いた。

「目鼻立ちが木石の妙を得て居るから。」

「成程。そいつは素敵だ。」

こんな調子で彼等の間には、新任早々の体操教官に緯名を付けた。

彼は自分の付けた緯名が用ゐられた事と、當のたくましい教官とに對する自分の愛着の念が何等かの因果關係をもつて居る様に感じられて嬉しかった。

實際、箱庭といふ緯名は彼には侮蔑や嘲弄の意味を持つて居ないのである。それ處か、着任挨拶の僅かの時間に、彼の心に、頼もしい様な、誇らしい様なある尊敬の念を印したその魁偉な顔、こげバン色の皮膚、堂々たる軍服、かてて加へて、その男性的な調和のとれた目鼻に對する彼の美稱であつた。

「實に立派だな——」彼は教官に會ふといつもさう思つた。日清、日露兩戦争で、馬上遙に叱咤したであらう、勇姿が目に見える様であつた。「確に我校の誇りだ。ね君。」よく彼は友達にこんな事を云つて友人の同意を求めたものだ。

「氣を付け！」

何といふ素張らしい力強さだ。

「右へ習へ！」

飛び付きたい程だ。

「前へ進め！」

食ひ付きたい程だ。

そして號令臺から下りて、大跨にバカッ／＼と音を立ててゆく足取り。

「ふーん！」

彼は毎朝、常に是だけの感動の過程を繰り返す。そして教官の姿を飽かずに眺め、見えなくなると直ぐ、

「それにしても、スツボンのあの惨めさ」と、この時に限つてあの貧然たるスツボンを思ひ起すのであつた。

夏の体操。

十分位遅れて箱庭先生はおもむろに出てくる。柔い溫さを顔一面に吸ひとりながら。隅

ついでづるをきめこんで居た彼等が、一固りに集る。

「そんな日向に集る必要はない。」教官はサーベルをがちやつかせながら、皆を雨天体操場へ連れてゆく。

「右へ習つたら休め。」

「岡田」。出席をとる。

「ハイ」

「村山」

「ハイ」

「根來。ね、ね、だつたね」

「さうです。」

「うーん。ぢや君は紀州だね。さうだろ。」

「ええ。よく御存知ですね」

「そりや君。――。強僧（niche）の子孫だといふこともわかる。」

教官へ、一時に五十人の注意の矢がとぶ。

「君等も當然知つて居る筈だ。」一寸反り身になつた。「地理では根來塗りを習い、根來寺

は歴史で知つた筈だから――」

先生は頭が好い、といふ事がその後定評となつた。

一つの逸話。

「先生が校長と大論争をした相だ」一人の生徒が、感激の中から口をつき出して彼に話しかけた。

「どうして？」

「授業の前後にあんなに放逸な時間をとつて、眞に体操を二十分か三十分位しかやらないのは甚だ困る。今迄には全くなかつた事だ。第一早く休ませられては他の授業（はた）にもさわる。而していくら夏とはいへ日向でやれない様では、生徒の爲にもどうかと思ふ。と詰問したんだ相だ」

「うん校長がだね。頭が古いからなあ――」

「處が先生の曰くさ、元來夏は身体に緊張の欠ける時だ。だら一時間やるより、生徒が自發的に二十分やつた方が、ずっと爲になる。又、他の授業の邪魔になる様なことは斷然ない。私が保證する。かう云ふわけで論争が初まつたんだ相だよ、君。」

「それから？」

「勿論先生に利があるわけさ」

「學生の爲に校長と——」

「偉いね。一寸出来ない事だ。」

彼は偉大さの中に教官の姿を抱擁した。實に、それこそ、それに校長と教官との顔が、彼の胸の中で狂奔し、亂舞し出した。

歡喜が醺酔した。最先きにぶつかつた仲間に云つた。

「君知つてるか？ 校長と箱庭が——」彼は休みなく喋舌つた。

「辭職するといつたら、校長青くなつた相だ」情性と想像が最後にかう付け加へた。

「誰に聞いた？」

「皆んなが云つてゐる。」

「弱つたな。——實は僕が、そんな事があるかも知れないつて云つたんだ。想像で——。」

箱根への修學旅行があつた。

かう云ふ時には、都會の生徒特有の早熟さがより以上に眼をさました。彼等は教師等と

の間に、藪や、屋根の隔りををいて煙草をふかした。夜は好奇心と轉換期の衝動がウイスキーや和酒をなめさせた。

彼は四五人の仲間と、第一日目の夜、宿をぬけ出て、一軒の薄黒いうどん屋にとび込んだ。

土間に切つた爐、自在から吊り下つた鍋、木の根そのまゝの腰掛等々が彼等の目には珍らしく、嬉しかつた。

默契の中に酒が出た。初めは黙つて飲んだ。皆んなの腹綿の吸取紙が共鳴した。盃が劇しくなつて行く。

「さあ、汲ごう」「よし」かうした第一段の會話と、うどんをすすめる音が、やがて、

「好い氣持だ。」「酔つた。」「ソフトホーカスだ。」になつた。うどんの音が高い談笑に消える。

第二段の會話が轉つた。

「箱庭の處に行かう」彼の心の中の可愛い、惡魔が叫んだ。

「よし、行かう」皆が應じた。

惡魔が一寸姿をかくした。

彼等は教官の處へ出かけた。小心から生れた大膽が逡巡^{たゆち}つた。

「——先生」彼は口を切つた。

「戦争の話をして下さい。」一人が應じた。

「して下さい」皆の大膽が共力した。

「飲んでるな、困つた奴等だ。」教官は笑つた。「他の先生方にわかつてはいけない。外で酔をさまして来やう。さあ」。

教官と彼等は湖のほとりを散歩した。

その晩彼等は床の中で、箱庭先生は偉い、雅量があると、一致した。

その明くる日、彼等は殿^{しんがり}の先生の目をぬすむ爲に藪の中にかくれた。

うまくまき終えてから、彼等はポケットから煙草をとり出した。紫色の煙りが何本も、澄み切つた秋の空に舞ひ上る。注意はその煙の運動にのみ、歡喜と溶けあつて居た。

「こらく」不意に後で聲がした。

皆は一齊に振り向いた。思はず煙草を棄てた。

「棄てなくてもよかつたのに」箱庭先生は云つた。「ははは、。だが君等は手ぬかりだ。他の先生だつたらどうする」。

黒い道から、五六本の煙がスーと立つて居た。

彼の心に教官が神様となつて現はれたのはその時からである。

そして、愈々或雨の降つた日である。

体操の時間は潰されて「御話し」といふ事になつた。彼等は喜んだ。

「今日は雨天体操場を他のクラスに使はれたので止むを得ず——」箱庭先生は語尾を笑ひで消した。

「いつもかうだと思つては間違ひ——」

皆も笑つた。

「處で皆んな、おとなしく自習でもして」

「わあ、先生御話し。御話し。」

「君等はまるで駄々つ子だね。わあ、つなんて。——一体どんな御話し？」

「戦争の御話し」

「戦争？　もう、先の先生^{せん}が御話しして下さいたらどう？」

「い、え、まだ」

「ああさうか。先の先生は軍人ぢやなかつたんだつけね」

彼の神経がピリリと刺かれた。

「ええ。スツボンです」誰かゞ小聲で云つた。哄笑の泉が教室中に吹き上がった。

「何？ スツボン？ はははゝゝゝ。どうしてそんな渾名が付いたのかね？」

瞬間、彼は教官から眼をそらした。苦々しさが顔中にはびこつた。

「食ひ付いたら放さないんです」一人が高々と云つた。

彼の顔の苦々しさが繁殖した。

「一度憎まれたら大變なわけだね、ははゝ」

「その通り、ははゝゝゝ」皆は和した。

彼は教官の顔を凝視した。小憎らしい目元の微笑が引きつける。「こんな筈はない」彼は自分に云ひきかせた。嘲弄されてるのは、あの大嫌なスツボンなのだと、思つて見たが、不思議に、頭と胸で坂車を押して居た。自分で理由をはつきり知れなかつた。

「ぢや、とも角、話す事にしやう。ええと——何處の戦がいゝかな。鐵嶺、遼河口と、まあいゝわ、今日は初めてだから、私が知つてる全体の内殊に面白い處を話すことにして——」かう前置して、雄辯に語り出した。

戦争の模様の糸は教官の口からひき切りなしにたぐられて行く。やがて今の解し得ない感情はすっかり消えて了つて居た。引っぱられ方が強いので彼は聞いた事をごん／＼後ろへ置去りにした。たゞ

「元來陸軍では記録に形容詞を用ゐないのであるが、その日に初めて、『黄塵萬丈、咫尺を辨せず』といふ語を使つた程であつた。」

「暗闇の煙草の火は不思議な程、遠くから氣が付くものであるから、自分は帽子を覆としてゐるんだ。氣兼ねして飲む程煙草はうまいものはない。ははゝ。おまけにたつた一本——」この二つの事が妙に走る頭と注意にこびり付いて居る。

彼は益々興味と英雄心の中で騒ぎ立つ。

「處で最後に二〇三高地の激戦。實際この戦に就ては恐らく皆んなに、その10も傳へる事は出来まい。而もその白兵戦に参加して現在生きのこつて居るものは廣い日本に、私と他二三人であらう。どんな事があつたつてスツボン先生なんかからは聞かれない話——はははゝゝゝ」

彼の歡喜と英雄心が一時に消えた。身体中を猛烈な勢で下から駆け上つた冷氣が、彼の視界を眞つ暗にした。

と、その冷氣が腦天からシューと吹き出た。

瞬間、机の上のインキ壺が教官めがけて、投げられたのに、彼は氣付いた。

「あつ」教官が叫んだ。喧騒が一時に教室で煮え立つた。

二分後。階段の蔭である。

「生徒の手まへ、こゝへ呼んだものの、別に退校とか停學にしようと思ふのではない。だが、以後は氣を付けて呉れなくては困るよ。君」まだ生々しいインキの痕のあるカーキ色が云つた。

彼は黙つてゐた。木石の雅致が種々に變つて寫つた。

やがて、彼は薄暗い廊下を歩行いてゆく教官の後ろ姿をボンヤリ見つめながら考へた。

「退校にしてくれた方がよかつたかもしれない。スッポン先生の爲にも——」。

教官は歩行きながら口の中で云つた。

「あの男は反軍國主義だ。あつち。」

雀 草

脇山康之助

(一)

三上參吉の妻が死んで間もなく、彼の妻の病室に當てられて居た南向きの八疊を中心に、可成り大きく建築が加へられたが、母屋の方はそれと反對にすつかり打ち毀されて了つた。大きい空地は、雀草が一杯生えたまゝ、半年以上も打ち捨てられてあつた。

彼を知つて居る人々、それから通りすがりの人々の中には、彼に、その空地を融通して呉れる様に、直接に或は間接に頼み込む人も随分あつたけれども、何時も彼はかう云つて拒絶して居た。

「あの地面は、何もお譲りしようと思つて、わざわざ空地にして人目を牽く様に勉めて居

るのぢやありません。もう暫くすると、あの土地に、私が前から計畫して居た物を建てる積りなんです。いくら妻に死なれたからつて、あれの病室に籠つて小さくなつて居なけりやならないと云ふ譯もありませんからね。寧ろこれから一層懸命になつて働く積りなんですよ。」

かう云はれて見ると、彼の計畫して居る事を誰もが知りたがつた。けれど彼は、それはつまらない事だだけ云つて頑強に口を開かうとはしなかつた。

彼は、その空地に幼稚園を建て様と思つて居たのだつた。それは彼が學生時代からの希望であつたし、年を取れば取る程小さい子供達が少しのこだわりも無く無心に飛び歩いて居るのを見ると耐らなく自分の過去の幸福さが活々して甦る様な氣がし、又呪はしい程年とつて醜い然も自分の青春を臺なしにし然も飽く迄女と云ふ者は、男に對して反抗する爲に生存するのだと考へて居た厄介な妻から受ける苦々しい氣持を忘れる事が出来さうだつたので、妻の死なゝい數年前からその計畫を目録んで居た。

然し何事にも反對しないでは居れなかつた彼の妻は、殊更に之の事については強く反對した。金のない事、子供達の煩しい事、近所へ對する思惑等が反對の理由だつた。けれど

も彼には、それ等の理由はたゞ彼の妻が之の計畫を臺なしにして仕舞ひたい一圖から出て居る出任せだと思つた。金だつてたゞ見榮と理窟に家の一軒や二軒位建てる事の出来る位の餘裕が出て居たし、子供なんかは保姆の手に委ねれば、一向自分達には煩はしい筈はない。たゞ最後の問題は近所に對する思惑だが、之れだつて此の近邊に幼稚園がない以上、少し位騒々しかつた所で、自分達の子供の事を考へちや文句も云ふまいと思つた。然しこんなにけちの附いた以上之の計畫を實行する事は、彼の妻に對する面當になるし、又その爲に無鐵砲な妻がどんな態度に出るか解らなかつたので、兎に角或る時期の來る迄延期する事に決心した。

で彼は、妻が死んでから寧ろ意地に似た感情で、母屋を破壊して、校舎を築き始めたのだつた。

然しその時既に彼の心には、或る動搖があつた。

彼の娘の房子が、急に居なくなつた事だつた。彼の妻が居なくなつて、久し振りに本當の自分を取戻した彼に取つて、彼の娘は唯一の目的だつた。自分と云ふものを色彩つて居る唯一の裝飾として是非房子の存在は、必要だつた。不斷から彼の妻の氣難かしさに、不平を云つて居たのが急に、その氣むすかしさが逃げ去つた殆ど同時に姿をかくした事は、

彼には不思議だつた。

一通りの努力はして見た。然しその結果が無駄に終つた時、彼はそれ以上苦しまなかつた。駄目な物はどんなにあせつた所でたゞ深味へ落ち込むだけで、浮び上る事は到底出来ない云ふ事を知つて居た。

で彼は、房子に代つて彼を色彩つて呉れる人達を物色した。妻を貰ふ事——それは又以前の様な安價な生活を形造る様な感じに襲はれて實行し兼ねた。他人の娘を貰ふ事——之れも不可ないと思つた。他人である以上自分を本當の娘の様に無條件で受入れて呉れさうに思はれなかつた。妻を失つて然も娘に逃げられて平氣な父親——そんな事をその養女に、嘲笑されさうな氣がした。それは、彼の小さい虚榮心が、承知しなかつた。

所が或る日、彼は彼の建築の設計を引き受けて居た男に希望したい事柄を思ひ附いたのだ。彼の家とは大分離れた山の手の氣持の好い廣い坂路を歩いて居た。その坂路を殆んど登り詰めた頃、暖い日光に柔い空氣を輕快に元氣よく掻き亂した喚が、聞えて來た。それは總てを忘れて何か一つの事に熱中した瞬間に起る眞面目な力強い喚だつた。その上その喚が、若々しい鋭いものであつた事に興味を感じて、その聲の方へ思はず引き附けられて行つた。

道路に面して華奢な低い木製の門の中で、多くの若い女達が、一つのフットボールを懸命に追駈けて居た。本當に幸福さうに、熱狂した感情に頬を赤くして、たつた一つのボールを眞先に握る事を誇る爲に、總ての事を後に蹴散らして、努力して居た。然もその努力は、若い人間に特有な熱心だつた。彼がうつとり夢の様に美しい光景に見とれて居た時、何うしたはずみかボールが、彼の凭れて居た門の處へ轉げて來た。彼は、早速懐かしい追憶を現實に取り戻した時の様に、いそ／＼と嬉しげに取り上げた。先頭になつて駈けて來た女學生は、彼に飛附いてボールを受けとりながらかう云つた。

「有難う、小父さん。見てらつしやい、今きつと勝つて見せますわ。」

その女學生は、早速後から來た女學生達の間に勢よく姿を消した。それは短い瞬間だつたが、その女學生の睫毛の間に見覚えのある様な氣がした。白い顔に大きな眼を非常に美しく見せて居た睫毛、——それは房子の睫毛だつた。ニコリ微笑した時、睫毛が細められた瞳の殆んど全部を掩ひかぶさる様子は房子そっくりだつた。

彼は、なつかしい心持になつた。そして彼女達の熱した頬が、臙げになつた時、彼は淋しさうに歩み始めた。

その歸途に、彼が坂路を下り始めると、彼の前方を歩いて居る女學生が、先刻ボールを拾つてやつた女學生に似て居る様に思つた。そしてその事が決して錯覺ぢやない事を知つた時、殆んど無意識に言葉を掛けた。

「先刻ボールをして居たお嬢さんね。」

するとその女は、一寸した面識がないにも拘はらず喋りたくて耐らないやうに雄辯に話した。

「あら、ぢや先刻のお小父さんね、でも小父さんは、あそこで淋しさうに私達を見詰めていらつしやつたわね。」

「なあにたゞあなた達が、元氣に遊んで居たのをぼんやり眺めたんですよ。そしてすっかり年を食つた私達には、もうあんな嬉しい經驗にぶつかりつこないと考へて、悲しくなつただけですよ。」

「まあ、小父さんなんかまだ若いわ、私のお父様なんかもう毎日お風呂へ行つて碁を打つ事しか出来ないのよ。然もその基も臆句がつて殆んど手を出さないのよ。生きてるのか死んでるのか、丸で、解らないわ。それに較べちや、未だ未だ若いわね。」

彼は、此等の言葉が子供染みものだと思つたが、又何んだか自分をからかつて、居る言

葉の様な氣もした。然し若いと云はれて見ると、身体中の筋肉が矢張太くて伸が好い様な氣がした。矢張り若いのかなあと思つた。だから幼稚園なんて氣紛れを起したのだと辯解して見た。

けれどその時、房子の事を思ひ出した。

(年頃の娘。そしてその父親。)

(若いなんて胡麻化しなんだ。見縊つた嘲笑) その女も結局子供ぢやないのだ。

「戯談ぢやありませんよ、もそんな愉快な夢の様な時代は、私の氣憶にさえ上る事が無い仕末ですよ。」

「だつてお小父さんは、あんな騒々しい遊戲を嫌な顔もしないで見てらつしやつたぢやないの。お年寄なんて靜な事以外は何んな事でも嫌ふものよ。」

彼女はさう單純に——可笑しい程單純にさう云つて瞬きした。それが房子そつくりの様子だつた。

(房子に似て居る女。名前も房子を形取つて居るのぢやないか。)

思はず彼は喚んだ。

「お嬢さんのお名前は？ 房子？ 異う？」

「いゝえ」

その女は、さう云つて怪訝さうな顔附きをした。彼はしまつたと思つた。その女は自分を疑ひはしないだらうか。

(變な人。悪戯をするのぢやないか)と。

恐怖の一抹が、瞬間、その顔を陰鬱にした様に思つた。彼は恥かしくなつた。

「さよなら」

彼は辻褄の合はない挨拶をして、逃げる様に小路を右側に、嫌な都會の惡臭をも拘はな
いで飛び込んだ。

こんな事があつてから、彼は女學校と云ふ物に興味を持ち始めた。脂つ濃い若やいだ空
氣が自分を中心として造られて行くのを空想した時、喜ばしい生活が自分の不幸を償つて
呉れる様な氣がして、是非獨立して女學校を建て様と決心した。然し段々研究して行く中
に、女學校と云ふものには、莫大な經費と仰山な形式が必要と云ふ事を知つた。彼は彼の
資産がその半にも充たない事を知つて居た。その上仰山な形式には全く驚いた。單に教員
の資格の指定位なら未だ我慢する事が出來た。然しその他の法律の煩雜な命令には、寧ろ

呆れて言葉も無かつた。

そんな事から幼稚園を捨て、獨立して女學校を經營する事を斷念しなければならな
かつた。彼にとつてその事は苦しい事だつた。それ程一女學生との奇妙な邂逅、若々しい遊
戯が、印象深く彼の頭にこび附いて居たのだつた。どうしても幼稚園だけの靜かな美しい
方面だけでは物足らなかつた。弱い刺戟に満足出來なくなつて居た。堪へる事の出來ない
自身を恐ろしく思はない事はなかつたが、是非酔ふ程強く刺戟して、總てを忘れて仕事に
没頭させ感激した氣分に生活を續ける事を要求する意識の方が遙に強かつた。

(女學校。女學校だ。女學校が新しい生活の創造への有力な要求だ。)

彼は口癖にかう叫んで歩いた。そして最後に幼稚園に附屬した女學校を創める事に決心
した、と云ふのはさうすれば、可成り煩しい形式を脱する事が出来るし、資金も幼稚園の
方の經費の融通に依つて決着する事を知つたのだつた。そして忌まはしい手続きに要した
半年の後漸く實行に取り掛つた。

雀草が刈り取られて 地均らしが始まった。勢ひ込んだ掛聲と共に晴々した氣持が続いた。

彼の友人達は、皆好意を寄せて表面だけの援助は心好く許したが、實際的方面に迄努力の勞を採つて呉れなかつた。然し彼に取つてそんな事は大した問題ぢやなかつた。たゞ新しい校舎として若い女達を糾合して、愉快な日を送る事さへ出来ればよかつたのだ。

彼は殆んど無意識に軽い氣持の日を送つて居た。そして新しい建築が始まると、舊い母屋が打ち壊された時に、何んだか昔から生存して來た舊い個体が、みじんに打ちくだかれた様な氣がして憂鬱な氣分さえ感じたのだつたが、今はそれとは反對に全く新しい甦へつた自分が形造られて、新奇な充實した世界に對する強い好奇心に、早く伸び得る生命に、存分新しい空氣を呼吸したいと思つた。

まだるつこい日が経過するにつれて、校舎は立派に美しく完成し始めた。

ペンキの著しい香のする机も幾つとなく運び込まれた。可成立派なピアノも打ち込まれた。彼は、それ等總てに手を觸れて見た。冷たい埃っぽい觸感に、机もピアノも全部自分の所有になつた事を確證する様に思はれたのだつた。勢ひよいピアノのキイの彈性も、にこやかな微笑の様に思はれた。

願書受附の日になると、十二三通の願書が集まつた。然も彼の目的だつた女學校の方を希望する願書は、半ば以上を占めて居た。若し之の調子が續けば、締切り日迄には、豫定した人數を超過する事が明白だったので、此の分ならば盛んな開校式を舉行して、華かに實行の第一歩に取り着く事が出来ると思ふと、案外事柄なんて少し敏捷に行動すれば、簡單に行くものだと思つた。

彼は又、空地を分割する様に依頼した人々、彼の目的を聞き出す事の出来なかつた人々、それから彼の仕事を驚いたり嘲つたりして居る人々に對しても決して引目を感ずる様な事はなく、却つて肩みが廣い様に感じた。

盛んな開校式には、是非此等の人達をも招待する必要があると思つた。さうさへすれば、彼等はきつと自分達の今迄間違つて居た事に氣附いて、却つて獨力で此處迄漕ぎつけた彼を尊敬し始める事だらう。

さう考へて來て彼の心は晴々して、段々街で會つた若い女の絢爛たる姿にも、庭の紅みが、つた豌豆の花房迄も、平氣でじつと感傷的にならないで見詰める事が出来る程餘裕が出て來た。

然し又彼の晴々した生活は、再び憂鬱になり始めた。最初の景氣好さは、決して好い前觸れぢやなかつた。最初の日に比較的多數を占めた女學校の志願者は、翌日から殆んど姿を見せなかつた。たゞ時に忘れられた記憶の様に、又丁度点を投げ打つ様に、ひよこ一人二人の希望者が現はれたが、締切りに近づいても、二十人以上の數を示さなかつた。此の分では締切り日の急激な増加を豫想しても決して彼の苦心を償ふ程多くの犠牲が、集まりつこないし、さうなつた以上彼の學校の成立は全然不可能な事だつた。彼は、房子を失つた時よりも強く悲しんだ。そして悲しみの後に伴ふ憂鬱がすつかり彼の元氣を消失せしめた。けれども幼稚園には、相不變賑かな希望を持つ事が出来た。

若し此の希望が失はれて居るものならば、創造した空想が、永久に實現しない事を見せつけられ、然も彼の虚榮心が充分氣附けられない事を考へては、恐らく彼は狂ひ出したらう。

舊い理想が、僅かに生存の可能を斷定した。そして幼稚園と云ふ一つの範圍に寄り掛かつて、女學校位と、負惜しみに似た意地張りに僅かに満足した。

けれども何處か心の奥底で、理想が少しでも枉げられたと云ふ事は、全部の理想の破壊を

意味する様な氣がして、即ちその小さいはずみが、大きい破壊の前提である様に思はれて、著しく興味を失はない譯には行かなかつた。

やがて彼は、筆太く女學校の志願者に、拒絶を書いて居た。

(三)

建築が完成すると同時に、開校式を舉行した。けれどもすつかり磨り減らされた資金と感情の爲に、表面的にも内實的にも華々しい儀式だとは云ひ兼ねた。がそれでも彼の歡喜を表徴して居た彼にとつて希望の儀式であつた。

子供達の人前を飾らない叫びが、廣間の赤と黄と緑の單色の裝飾帶の間を窮屈さうに充ち始めた頃、三上參吉は居間から式場へ通づる廊下で貰を燻らして居た。彼は今迄入園者の入園金を取立てゝ居たのだつた。四角張つた印章に腫れた手指に、貰は何時もより柔かに觸感を與へて居た。彼は、それを彼の晴々した氣持だと解釋しながら雜然とした紙幣——彼の理想の第一收穫を整理し始めた。

その時突然廣間の方から、人目を避けた軽い足音が響いて來た。彼は未だそれを感じない程金の勘定に熱中して居なかつた事を嬉しく思つた。(金に執着を持つた男)それが最も呪はしい叫びだつた。

のぞき込む様に戸が開いて、若い女が入つて來た。伸び切つて居た春丈けに、附添いの女かと思つたが、その瘦せて厚く化粧した顔が、彼を見上げた時に、それは房子である事に氣附いた。

「房子——」思はずかう叫んだ。

房子は、少しの感激も後悔の憂鬱をも表はさないで臆面もなく平然と返答した。

「お父様——あたし矢張歸つて参りましたの。本當の意味で成長して参りましたわ。」

彼は何も房子が本當の意味で女になつたとは思はなかつた。たゞ何かの経験と力の結果悪い意味の成長をしたと云ふ事は明かだつた。が然し嫌な印象を與へる彼女の経験に觸れる事を恐れた。

「それでいゝよ。然しお前の経験をお話しとは云はないよ。その事については沈黙し續けて欲しいね。然も幼稚園なんてつまらない事を始めて忙しくつてそんな吞氣な所ぢやないのだ。」

「さうですつてね。幼稚園。まあ素晴らしい事。」

「お前は居ないしと云つて引きこもる程年を食つてないしね。」

その時準備の完全に終了した事を知らせて來た。

「ぢや暫時休んでおいでよ。」

「いゝえ。あたし参列して見たいのよ。」

房子はかう云つて彼の後を追つた。

參吉は、演臺の隅で始めての経験である挨拶の文句を繰返しながら、房子の事を考へた。「房子はひねくれた。世間が不可なのだ。休んでおいでつて慰さめる積りで云つた好意に迄反對するなんて、ひどい性曲りになつたものだ。だけども房子には何も言はない方がいい。あんなにひねくれた上に疲れた女に、苦しい追憶で苦しめるなんて不可ない事だ。本當の親として、子供の爲に、平靜を失つた心に慰みを與へる事はあたり前だ。けれどもつと積極的に、失つた平靜を取り戻す事さへ出來りや文句はないのだ。だから房子には何も云はないで私の家庭に、寛大に抱合してやりさえすりや好いのだ。優しい自由な父親となるのが、一番賢い遣方なのだ。」

その時、しきりに挨拶する様に催促されて居た事に氣が附いたが、何時もの様に慌てなかつた。たゞ彼の友人の大學教授のだみ聲を聞き洩らした事を残念に思つた。

〔四〕

その後暫く静かな日が続いた。

そしてその間に、三上參吉は、最も賢い方法だと信じて保母の一人を罷めさせて、その代りに房子を働かせる事にした。それは房子の希望だつたし、彼にしても苦しい今の状態に少しでも餘裕を作りたいと思つて居た矢先なので、房子にさう提議されるや否や一も二もなくさうする事に決定した。その犠牲者は、年は若かつたが可愛想に色が黒い上に口の邊に大きな傷痕があつた。力は頑強だと云つてもいゝ程だし、然も一番勤勉な女だつたので、免職にする口實を見出す事は、中々困難だつた。で結局かう云はなければ、ならなかつた。

「房子があなたの傷痕を氣味悪がつて仕方がありません。生徒だつてきつと恐れますよ。それにあなたは未だお若いのだしその上身体だつて丈夫ですからこゝをお罷めになつたつ

て大して不都合も無いと思ひますがね。」

「そりや餘り無茶ですわ。始めから承知の上での事なのに、その事を口實にされるなんて亂暴ですわ。然しそれでもたゞ單に生れ附きの醜さだけが理由なら諦める事も出来ますけれど、房子さんの身代りに——房子さんに私の地位をくだらない玩具として犠牲にする事は、私の自尊心が承知しませんわ。あんな意地汚ないふしだらな女に、私の誇が挫かれるなんて事は承知出来ません。」

その女は、傷の爲に釣り上つた唇を顫はせながら上つた調子で激して居た。然し彼は房子の事が徹底的に痛罵された事を怒つた。

「なんだつて。一体私しを何んと考へてゐるんだい。幼稚園の所有者だぜ。所有者の行動に、雇人がかれこれ云ふ權利は無い筈だ。」

「ぢやどうしたつて私を罷めさせるのですね。得勝な人だ。えゝ關いせんわ。どうせ獨りぼつちなもの。」

かう云つて、女は怒に顫えながら歸つて行つた。その女を思ひ浮べて來ると、なんだか思ひ込んだ一圖から大變な事件でも惹き起すのぢやないかと思つた。

(放火。殺人)

然しその恐怖に似た感情も、房子が自分の目的通りに行つた事を聞いて、

「女つてどんな種類の女だつて子供に愛を感じて居る者よ。だからあんな女でも憎れ口なんかきいたのよ。心配なんかなくてよ。」と云つた時、彼は安價にその不安と焦慮を一掃して思はず微笑した。

然しこんな事件が起つて以來變な不安な氣分が、他の三人の保姆の間に漲つた。何時安らかな状態からごん底に突き陷されるかも知れないと云ふ悲しい豫想が、彼女達三人を一樣に落着かない氣持に押し包み始めた。

「無茶だわ。亂暴だわ。」

こんな吐きが、ピアノの片陰や踏りの眞最中に思出した様に飛出して來た。彼女達の房子に對する反感は、露骨に表はれる程激しかつたが、大きい力に對する恐怖から、その反感が表面に表はれる様な破綻に迄押及ばなかつた。

然しそれから來る日來る日が平安な物靜さに、愉快な哄笑に、のんびりして居たので、彼女達の不安は幾分薄らいだけれども、房子に對する反感と輕蔑は決して打消されなかつた。かうして世間の總てに見出される大きい力と小さい力の間の氣ますさは、こんな取る

に足らない彼の理想の間にも暴威を振つて居た。そしてそれは、腫ぼつたい氣ますさだつた。

然し房子には、輕快な日を無聊さの餘り喚き散らさないで濟んだ。房子の父親は、彼女の家出に關しては一言もしないで無條件で、前よりも一層愛撫を與へた。寧ろ煩しい程又執拗と考へられる程愛撫した。房子には、その行爲に依つて、彼女の父親を甘い男だと侮蔑的に考へられて仕方がなかつた。そしてたゞ生きて居るに過ぎない形骸その癖時々氣まぐれを起す事に生活を繼續して居る土人形の様に考へた。

(自分が居なけりや乾き上つて崩れる土人形)さう呟いた。

で彼女は思ふ存分自分の意志に隨行して行動した。そして自分の不可ないと思つた事は最惡の存在だと信じた。そして敢てそれを犯す人間に對しては、裁く力を持つてゐるものと考へて居た。

〔五〕

或る日、三上參吉は、校庭が淋し過ぎる程荒涼たるものである事に氣附いた。たゞ二つ

の滑臺と一つの鞦韆が悄然と寂しさうなのが著しく眼に苦痛だつた。一層の事小さい花壇でも造つて子供達の心を柔げて遣らうかとも考へたが、それには地域が狹隘に失した。その上育て上げる苦心を考へて、手の比較的掛らない花鉢でも飾りたいと思つた。

でその夜、美に對して漠然たる鑑賞眼しか持合せない彼は、繊細な愛好を持つた房子に選擇させる積りで、近所の夜店に出掛けた。

その頃は未だ薄明るい黄昏だつたので、素見客もまばらだつた。カンテラの灯も橙色を帯びた赤色に、陳べられた物品を、美しく豪奢に見せかける魅力を失つて居たが、澄徹した空氣がさわやかで、腫れた人息のわずらはしさに苦しまないで済んだ。

彼は一軒の花屋を素見し始めたが、一見した所色んな花束を豊富に持つて居たが、缺点のないバツとしたのを探手段になると、全く氣に入る様な花鉢は難かしかつた。然し存分求めた結果、長持しさうな厚つぽたいムスカリーを買つた。

「どうだね、このこつてりした藤色がいいぢやないか。これで一圓しないのだからね。」

房子に相談する積りで振り返りさまに話しかけた彼は、相手が全然未知の男である事に氣附いて、不得要領な氣持に顔を赤らめて小刻みに店を逃げ去つた。然し房子を長い間焦りながら求むる必要は無かつた。店の外で房子は、若い皮肉振つた早熟せた瞳が冷たい男

と話して居た。兎に角彼には、房子が自分を無視した行動が、こんな小さい範圍に濟んだ事を喜んだ。

彼を認めた房子は、たゞ不意に姿をかくした辯解をした切りで、その男を彼に紹介しようとしなかつた。彼は、相手が若い男であること云ふ事、従つて房子に對して自分よりも牽引力を持つて居ると云ふ事に少し嫉妬を感じた。

「このお方は誰？」

「まあ御存じないの、とつくに知つてらつしやるそばつかり信じてましたのよ。此の方はね——石崎さんよ。ほら御存じでせう。」

房子は窮屈想に説明した時、その男は、強制されるのを怒つた様な調子で亂暴に叩頭した。

「房子さんのお父さんですね。私は貴君の事業に深く興味を持つて居ますよ。でも素敵な事業ですね。盛大で結構です。獨身者にはいゝ慰さみですよ。でも毎日澤山のお子供達に、煩しい程賑ぎやかですからね。」

何んて皮肉な男だらうと思つた。子供が、二三十人も集まりや騒々しいのは當然だ。それを嫌に遠廻しに非難するなんて氣味の悪い奴だ。さう考へた。然もその男の瞳のみが愉

快さうに亂れた彼の感情を微笑して居た。かうして石崎と云ふ男に對する彼の第一印象は決して好いものぢやなかつた。

房子は、遠慮なく石崎と話を續けた。そしてそれは若い者の間にだけ、大切にされそして夢見る原因となる様な甘い種類のものだつた。で四十九と云ふ年齢が自然彼と彼女達の上に陰鬱に距離と氣まずさをこしらへた。

彼はその若い男の思ひ掛けない出現にすつかり狼狽した。彼は、その男が總てを理性に訴へて支配裁定して行かうとする唯物的な光澤の瞳が、譯もなく執拗い腕の腹の蒼白い氣味悪さを感じしめたが、それにも拘はらずたゞ若いと云ふ事だけの力で房子を奪つて行くのだと云ふ豫感に襲はれて居た。彼は又かう考へた。「然し房子が家庭を離れて居る間は、幾分なりとも世間——想像と空想を超えた現實の醜場に——突入して來たし又立歸つた現在に於て境遇の順應に、環境の支配に満足して居る以上、容易にその男に身を任す様な事はあるまい。若しその男との間に愛が存在するならば、自分を充分理解して居る筈の房子、そして感情の幾分よりも強い理性に支配されて居る房子は、きつと彼に對する愛を打ち開けて正式の結婚を要求する位の考慮と餘裕を持ち合せて居るだらう。それだから心を苛立て

たせる必要は無いのだ。」然しそれにも拘はらず不安の影は相不變濃かつたが、無理にかう考へて見なけりや不可ないと思つた。

「だが一体二人をさう複雑に考へる必要があるだらうか。二人の關係は、單に知人と云ふ範圍を越えない清純——之の言葉が最も之の場合にはふさはしいのだ——なものではなからうか。」

さう考へて來る中に、彼は可笑しくなつた。彼にはその取越し苦勞が可笑しくてならなかつた。妄想だと思つた。

彼は、耐へ切れなくなつてニコリ微笑した。彼は彼の鋭敏な省察力と細敏な思考を誇つた。そして空想から甦えつた新鮮な身体を、房子の方に振り向けた。

「——じやきつとね。」

房子は何事かを約束してから、平靜な態度で近附いた。彼は、無益な空想から目覺める事が、少しばかり遅れた事を残念に思つた。

「一体何を約束したんだい。お聽かせよ。」

「いやよ。大人なんかの聞く事ぢやないのよ。」

大人。それは謙遜した言葉だ。老人と呼ぶ積りだつた事は明白だ。折り曲げた空想に神

經の纖細なそして苛立だつて居た彼は、罵られた口惜しさに、打ちのめしたい衝動を感じた。そして自制する爲に、次の様に話題を變化しなければならなかつた。

「ぢや聞かないよ。………だげと一体あの男と、どうして知り合ひになつたんだい。」

「あら。お父様御存じの癖に。」

「知らないよ。本當だよ。」彼は本當に驚いて尋ねた。

「まあ。本當でも變ね。あの方はね、あのあたしが、お父様に置き去りを食はせた原因なのよ。お分りになつて。」

すつかり父親を甘く見た房子は、疑ひながらも正氣に言ひ切つた。

彼はギョツとした。彼の空想はもつと高くもつと深刻でなければならなかつたのだ。そして急に峻烈なる不安に襲はれた。

「で今でも關係があるのかい。」

「そんな事あたしの口から言へませんわ。でもあの人が大好きなのよ。」

「そんな事なら一層の事結婚しちまつたらどうだい。」

彼は、房子が案外率直で子供らしい事に幾分安堵して、からかひ氣分でかう言つた。

然し房子は、案外眞摯な面差しを失はなかつた。

「え、あたしだつて出来る事ならさうしたいのよ。だけど、今はそれが出来ないの。あの人にはね、前から世話になつてた女の方があるのよ。そして石崎さんだつて、あたしを愛して下さるのですけれど、矢張りその女に對する義理から私と結婚する様な不人情な事は出来ないつてお仰言るのよ。私の結婚する事に依つて一人の女性——少しの怨も罪もない一人の女性を破滅せしむる事になるのだつて泣いておつしやるのよ。それを聞いて見ると石崎さんのお苦しみになるのがお氣の毒で、お氣の毒で、どうく一年近くも同棲した結果心好く戀をお譲りしたのよ。二人で生活して居る間だつて、愛なんて問題を離れて、たゞ石崎さんは、その女から受けた物質上の援助を義理堅く濟まない濟まないつて泣いてらつしやるのよ。本當に私迄泣き出した位なのよ。」

彼は、房子が家出した原因は戀愛だとは薄々感知して居たが、こんな男に、厄介な人間を對照として居たのだとは豫想も想像もして居なかつた。その上今でも彼が感知しなかつた石崎に對する愛着を分つた房子、然も充分女になり切つた現在に於て、石崎と之以上接觸せしめる事は危険だと思つた。で突さの間に、きごちない一つの手段を思ひ附いた。

「ね房子、明日から暫く海岸の方へ遊びに行かないかね。大分暑くなつたから幼稚園の方なんかどうでもなるからね。」

然し一寸の間彼の話題の突然の變化に驚いたが素早くこの事に依つて石崎と自分を隔離しようとして居るのだと知つて、憤慨した口調で反對した。

「いけません。私を島流しにしようなんて。あたしだつて相當の考へを持つて居りますわ。無鐵砲な事をする氣遣は要らない積りよ。」

「相當の考へ？ 一体家出なんて相當な考へを持つた者のする事かい？」

「なんですつて。お父様。そりや多くの場合は自制し切れなくなつた人達がする無考への行爲ですわ。けれどあたし達の場合は、飽くまでも理性を忘れませんでしたわ。理詰の結果豫定した軌道に脊り出た迄でしたのよ。それだのにお父様はあたしを單純なお嬢様とお考へなのね。」

彼女の言葉はその場合恐ろしく理智的のものだつた。誰だつて、愛して居る者の爲めに、破綻を起す様な行爲に出られた時反抗する事は避け難い事である。が然し彼女の反抗は餘りに力弱いものではなからうか。少しも感情の輻輳錯亂を表はさなかつた。さうして、それは繕ふ者、あざむく者のみの有する冷淡だつた。それは彼女の技巧の打ち及ばぬ處だつた。然し彼は房子のむきな態度に狼狽し切つて慌て、謝罪した。

「そんな積りぢやないよ。そりやお前は例外だがね。」

「見え透いた嘘ね。けれど私にはつきり約束して下さいな。あたしが無考へな行爲をしない代りに、あたしを束縛しないつてね。」

彼は、房子が再び彼を見捨てると言ふ事が悲しかつた。最初の時は、輝かしい建設に緊張して、房子よりも彼の理想に忠實だつた。けれど子供達のがさつな性質に幾分飽き始めた現在に於て房子が居なくなると言ふ事は、苦痛だつた。強すぎる刺戟だつた。そして房子と相手の男に附いての懸念はその苦痛の想像に無視された。

彼は最後に房子に盟つた。然しそれは餘りの容易な服従の様な氣がした。今一度房子を非難して見たかつたので、

「房子。」と言つて見た。然し一層ひどく房子の怒りを買ふ事が恐ろしくなり始めた。

「なあに？」

「なんでもないんだがねえ、岡塾の栗饅頭でも買つてこようか。」

話をかう轉じなければならなかつた。

「あら甘いもののお嫌ぢやないの。」

「お前が好きだと思つたのさ。」

氣さづい沈黙が続いた。

「でも好きなら買つたらどう？」

「ようう。」

「今日は餘程變なのね。」

彼は今日の氣まづさを甘い物にでも打ち消したくなつた。

「やつぱり買つて来ようね。」

「まあ。」

二人は始めて微笑した。ムスカリイは彼の害なはれた感情とは反對に靜かに美しく校庭の陽に呼吸して居た。

〔六〕

彼と房子の間に、こんな厄介な問題が起つてゐる間に、保姆達と房子の間にも又困つた問題が起つて來た。

この事があつた翌日、彼が丁度重い體を起したばかりの時、最も若くそして房子よりも美しい保姆が、彼の居間に急込んだ焦躁な態度で飛び込んで來た。

「私は、もう此以上我慢が出来ませんわ。本當に房子様は亂暴ですわ。」

「——と言ふと——。」

「何時もの事ですけれど、今朝もピアノの埃を拂はなかつたと言つて、私をお撲ちになるのですよ。それも誰も居ない所ならまだしも、事ですけれど皆の居る前での事ですもの。あんな些細な事で、あんな大きな侮辱を與へるなんて、本當にあんまりですわ。その上私は昨日歸りに、ちゃんとお歸除は済ませた筈ですわ。」

さう言つて大仰に蒼白な頬を抱く様に兩手で包んだ。

けれど彼は房子がそんな亂暴な無茶な事をする筈がないと思つた。

「そんな馬鹿氣た事があるものか。房子はそんなにひねくれて居る筈はないよ。」

「フ、。娘馬鹿つたら本當に仕様がない。」

その女が、うつかりかう饒つたのを聞いた彼は怒つた。

「フ、んだつて。一体そりや雇人が主人に對して言つていゝ言葉かい。さう言ふ風に生意氣だから房子に叱られるのさ。女つて何んでも大きく言ひたがる者だよ。一寸叱鳴られた位が、打ちのめされて腫上つたつてさ。こんないけ圖々しい奴なんかは、何處へ行つたつて劍突き喰ふよ。」

「まあ、何んですつて。私が、嘘を言ってるんですつて。何んな所からそんな事をお仰言るのですか。誰にだつて聞いて御覽んなさい。房子さんは、石崎さんが、昨日あたしに、揶揄つたものだから嫉けたのよ。それを知らないなんて、お先真暗ね。本當に馬鹿氣てる。」その女も、中々負けて居なかつた。かうなつた以上自暴だと言ふ考へに、支配されて居たらしかつた。そして飽くまでも、彼の娘に對する馬鹿々々しい仰山な溺愛を存分に皮肉つて見たかつたのだ。然し彼は此の場合、石崎と云ふ名前の出た事を、努力して秘密にした事件をまんまと嗅ぎ出された時の様な、恥しさと、落膽を感ずると同時に、二人の奇怪な異常な關係が世間から嘲笑される事を恐れた。

「石崎だつて？ 其男がどうしたんだい。」

「石崎さんを御存じないの。いよく娘馬鹿ですわね、毎日々々此處へ私達に揶揄ひにやつて來るのよ。閑潰しにね、ひつこい上に、頑固で亂暴と來て居るのよ。皆なに嫌はれて居ながら、房子さんに大氣に入りですとさ。」

「一体何を言つてるんだい。在り得ない事だ。馬鹿だね。」

「えゝござせ私は馬鹿でせう。然し房子さんの様に嫉妬して狂ひじみた行爲は爲ない積りですわ。」

「免職だ。早速出て行つて貰はう。」

その女は複雑な然し軽い表情に、奥底に滲け込む嘲りの態度を見せつけながら出て行つた。

「そして今に皆御拂箱ね。」

その女の此の大膽な言葉を耳にしながら、房子の事である以上第三者の立場で決着する事は困難だつた。然し兎も角も房子に聞き糺した方がいゝと言ふ事に氣が附いた。

そして房子が入つて來る迄に充分房子を苦しめるに足る方法を思ひ浮べ様としたが、錯亂した心の爲に、それは不可能だつた。房子は、憂鬱な顔をして居たが、決して彼の問を拒絶する程氣分を害つては居なかつた。そして彼が保母の言つた事を全部承認してもいゝかと聞いた時少しの躊躇もなく總てに少しの誇調も虚疑もないと斷言した。

「ぢやお前は世間と言ふものを無視して居るのだね。それが私にどんな大きな苦痛を與へるかと言ふ位は、お前も知つて居るだらう。それに芳子（今朝逃げ出した保母）を可愛さうだと思はないかい。そんな亂暴な行爲には誰だつて憤慨するよ。然も芳子はその爲めに兎に角一つの地位を棒に振つたのだからね。」

「だつて芳子は、あたしより美しい肌としなやかな指とを持つて居ましたわ。私よりはす

つと魅力的な瞳が石崎さんを引きつけたのよ。そんな事——辛棒出来ませんわ。誰だつて嫉妬しますわ。そしてその嫉妬は咎められる筋合のものぢやないと思ひますの。當然の結果ですもの芳子が怒つたのは、あれの勝手ですわ。だから罷めたつて少しも憐む必要がないのよ。得勝な女つて笑つて遣つたつて構はない位ゐよ。それに、世間。そんなものあたしには、少しも關係がありませんわ。あたしは、たゞあたし一人を中心とした自由な世間を形造つて、その中に存分に自由に、考へないで成長して行くのよ。それで充分だわ。他の世間との交渉の煩はしさが無くとも充分存在し續けますわ。何も臆病な不健康な社會に妥協して行く必要はありませんわ。寧ろその醜体なせり合ひを笑ひたい位よ。だからこれでいゝと云ふ事になるのよ。」

彼は當惑した。笑つていゝ事なのだらうか。それとも許して差支への無い事だらうか。然し結局房子が非常に強い感情に支配されて居る事に氣附いた。そしてその感情の冷靜になるのを待つて、その單純な粗糲な考へを撓めて、女らしい女性を圓やかに成長せしめなけりや不可ない。そしてその爲に石崎と云ふ男の存在は決して好い結果ぢやないと思つた。

その時、不圖房子の最初の家出の時に引き較べて、現在の餘りに多くの房子へ對する思

ひ遣りを考へて可笑しくなつた。そしてかう説明して満足した。新しい創造に盲目的に熱中して居た最初は、房子を考へる餘裕が無かつた。それで餘裕のたつぷりある現在に於て、彼女の事を充分考へる事が當然である。

最後に残つた素直な保姆も、二三日後には他に就職口を見附けて居た。そして理由は、亂暴な彼の行爲に對する憎惡と不安からだつた。かうして房子一人を残して全部が、彼に叛逆した。房子一人を中心とした彼は、大して苦しまなかつた。けれどその女に對して留める事を要求する元氣を、失つて居た。

〔七〕

その翌朝房子は外出して居た。で彼は、先日來の不愉快な氣分でも消す積りで久し振りに子供達の間に入つて見た。然し保姆を失つた子供達は、氣まずい想ひに憂鬱な然も睨める様にむつちり自分達を眺める彼には少しも打解けなかつた。寧ろ氣味の悪い人恐ろしい人と云ふ印象を刻み込んだと見えて、彼が子供に近づけば、大抵は堅くなつた身体を恐る

恐る振り向けて、彼の方をジロツと上眼で眺めながら立去ってしまった。彼は鞆に近附いた。それに載つて居た可愛い男の子は、彼を見附けると澁面して顔を歪めた。そして彼がそのそぐはない態度に對して氣嫌を取る積りで鞆に手を掛けると、急にワツと泣き出した。餘りに急激にそして吠える様な叫びだったので、その動作のはずみに子供が振り落されたのぢやないかと恐れた位だった。

些細な事件ではあつたが、その爲に神経の苛立しさを覺えた彼は、すっかり氣を悪くして、親しまない呪はしさの餘り居間へ逃げ歸らうかと思つた。然し何かを握つて居なければ生きて行けない子供達にとつて殘酷過ぎる行爲だと氣附いて斷念しなければならなかつた。

で彼は所在無きの餘りムスカリーの鉢の傍に、落着いた感情を希望しながら立つて居た。其處は丁度石崎の家の裏側に當つて居て、その裏壁に日光を遮られて薄鼠色の濃い蔭には、ムスカリーの花が著しく醜く萎へて居た。何處迄呪はしい石崎だらうと憤慨して見た。その時突然彼は溝臭ひ耐らなくむかつく液体を上からひつ被つた。ねつとりした滴が、臉から唇へ、そして感覺の鋭敏な唇に苦味のある生暖さを感じる事は、決して氣持の好いものぢやなかつた。彼は殆んど本能的に上を眺めた。そして僅かに若い男の着物らしい白いき

らめきが閃いた様に思はれた。ぞんざいな巻き方をした褐色の帯にも見覚えがあつた。ムスカリーを買つた夜の石崎の姿だ。さうすると、その後には掩ひ被さる睫の瞳が冷然とそして豪然と閃いた様に感じた。猫の様に素早いものでありひそやかなものだつた。然し判然と褐色の帯の上に、二筋三筋、三角形に十字形それから奇怪な形に、ぐら／＼焼きつく夏の陽炎の様に微笑した恐ろしい幻映をま／＼感じた。ぞつとする錯覺に房子を見出した。

(異常な戀の耽溺者。俺の幸福を奪つた奴)

白い埃が濡れた着物に、ベツトリねばつて盛り上るのも拘はしないで飛出した。

石崎は二階に居た。然し房子の不在は明白だった。

「一体何んで事です。」坐りざまにかう云ふと、石崎はそのみすばらしい濡れた姿を認めて笑ひ出した。

「これは失禮しました。うつかり氣遣かなかつたのですよ。然しそいつは繪具皿を洗つた水ですよ。毒にも藥にもなりませんよ。一寸御辛棒下されば、萬事が解決するのですよ。」何んと云ふ皮肉だらう。彼にはその辯解を嘲弄としか受取れなかつた。

「過失だつたら謝罪されるのが當然でせう。然も他人の庭先へ汚水をぶちこむなんて、然

かも謝罪しないなんて。そんな亂暴な生意氣な男に房子を渡されるものか。」

『失禮しました』と云ふ言葉は謝罪の意を表示して居ませんか。それに何んな積りで、こんな取るに足らない事件と房子さんとを結びつけるのですか。房子さんは房子さんです。貴君の考へてゐるやうな子供ぢやない。だから當然要求する所もあらうし又自分の考へに支配されて行動される事もあるでせう。房子さんの生活意識や、生活様式だつて立派なものですよ。それを貴君はたゞ單に親と云ふ一つの契約——契約ですよ。決して利ぢやないですよ——を理由として、一層房子さんを支配しようとしたつてそりや駄目ですよ。」

「君は間違つた考へを持つてゐるんだ。詭辯だ。」

「いや決して間違つた考へでもなけりや詭辯でもありませんよ。眞理であり事實であるのですよ。規約一点張りの社會なんて、あなたのお考へ程複雑ぢやないのですよ。單純つて云つた方がいゝ位ですよ。だから水位ひつかけられたつて、さうむきになつて憤慨する必要もないし、又自分の娘の事を隅の隅まで自分意志通りに征服する必要もありませんよ。ただ、海岸の砂が美しくて豊富である様に、自然の成り行きに委ねるのが最も賢い方法ですよ。」

田舎の人間の美しい素朴な印象を御存じでせう。叛く者を許すのですね。さうすると許

したキリストは叛いたユダよりも好評を博しますよ。」

「そんな馬鹿な事。馬鹿げてゐる。君は巫山戯けてゐるよ。」

「僕は金輪際眞面目ですよ。」

「嘘を云へ。でなきや君は酔つてゐるね。兎に角そんな皮肉な冷めたい男には房子をやれないよ。幾ら若いからつて無鐵砲すぎるよ。本當に遣れないよ。」

「然し房子は、私の物になりたいつて云ふのですから困りますよ。それに自分の娘を自分の所有物だなんて云ふのは舊い考へですよ。人間ですよ。だから笑ふ事だつて出きるのですよ。考へるのだつて戀をするのだつて出きるのですよ。まあ見てゐらつしやい、房子は私の許にやつてくるのですよ。あなたにさよならとも云はないでね。」

その時彼は、房子が石崎は結婚が出きない立場に苦しんで居るのだと云つた事を思ひ出した。これで勝利は、完全に彼の物だ。

「義理堅い男だと思つて居たが案外だよ。だけど君は房子と結婚出きないさうだね。さうなつたら結局私の勝だ。房子の様な尻の落ち着かない感情の強い女は、完全に君を得られない以上ぢきに君を斷念するよ。」

「これはお氣の毒です。假令は丁と出やうとした瞬間考へ直して半と出たと云ふ譯で

すね——。彼の落ち着きと皮肉は、段々熱烈になつた。「ありや手段ですよ。最初、安逸な生活が困難になつた時、賢い房子が古巢へ立ち戻るについて、考へ出したすばらしい手段ですよ。」

石崎はかう云つて愉快さうに笑つた。それが彼にはむづかしい痛ましい非難のやうに、感じられた。すべてが彼の敗北だつた。而かも切りぬける餘地の無い苦痛を伴つた敗北だつた。最初から石崎は、勝利者の冷めたい理性と餘裕を誇つてゐた。そして彼は、その理性から生れる皮肉と、餘裕から迸り出た壓迫に壓倒されてみじめな程、消極的な曖昧の状態を悲しんでゐたのだつた。然かし狂ひ出さなかつたこと、落ち着いてあり餘る餘裕をば相手に見せなきや不可ないと云ふ理性が強く働いたことは彼にも不思議な位だつた。潰れかゝつた彼の理想そして彼の希望——房子、それだけではにかみやの彼には狂ひ出す價値は十分あつた。それにもかゝはらず、彼は理性によつて行動することができた。そしてそれは氣の弱い愚な人間だと云ふことに、原因してゐるのだと思つた。

疲れた心に映つた石崎の濕んだ唇からは（弱い男）と叫んでゐた。やがて房子に對する愛着が意地悪い嫌惡に變つて行くのを感じた。

（房子は戀してゐるのぢやない。單調に疲れたのだ。）

さう叫びたかつたけれど挫かれた心の疲勞はその感情を頑強に拒絶した。

〔八〕

かうして、幼稚園は彼がそれに對する興味を失つたことに原因しないで、失はれて行つた。房子によつて破壊された理想だつた。然かも房子は執拗に彼の記憶に残り初めた。彼女に蹂躪された建物が嫌な記憶を含んで、彼の傍に存在すると云ふことは苦痛だつた。で結局校舍は失はれた。

雨の日であつた。漠然とした地面の雀草にボプラの葉裏のやうに、薄碧く光が籠つてゐた。ぼんやり雨を珍らしいと思つた彼は雀草を見た。

「雀草だなあ。」

かうした月並みな感心した口調に顔を赤かくした。唯單調な現在の生活には、その月並みさへ異常な出き事であつた。そして、何故か知らないが妙に恥かしかつたのだつた。

不景氣

太田辰夫

——時の宣傳日に書く——

「子供の三人もあるところへ行つて、あの人も困つてゐるでせうね。」
聲は母である。

「それもみな不景氣のおかげだわ。此の頃と來ちや、一寸した男やもめも……」
「おひでりだど、お云ひなのかい。」

「えゝ。ほんとに不景氣、今日だつて時の宣傳や何蚊つて、外ではずゐぶん騒いでゐるやうですがまるで不景氣の廣告ですものね。」

「お化粧の時間を短く、つてのかい。」
「一寸、冗談？」

「眞面目だよ。」

「人生は時の長短なりなんて、そのがありましたわ。」

「一寸まち！ おまえさん。それあ一体どんな意味だい。」

「そんなことあ、私だつてわかりやしないわ。藤坊にでも聞けば判るかもしれないけど。」
「おやと私は思つた。」

——人生は時の長短なりか——

「とにかく不景氣なんだわ。」

「不景氣てば、お前さんどこの今度の乳母はごう。」

「豚みたいやつよ。ぶよくして。でも乳だけはよく出ますから、まあまあこれで我慢しようと思つて。どこまで不景氣なんでせうね。」

「先のにくりたからね、いゝ女だつたが」

「あれに乳さへ出りや申し分なかつたんですわ」

叔母だな——と思つた。陽が照つてゐるのに、雨だぞと考へた。

「であちらは」

母が言つた。

「奥さん、まあお聴き下さい。子供は二人つて聞いてゐましたのに、行つて見ると三人もゐるのですもの。困りましたわ。」

——おや、叔母ぢやないのか——と思つてきくと、叔母の家の先の乳母らしい。

——三人も子供のある所へ嫁つたとはこの女のことか——

「それが亦、これも手に負へないやんちやばかりで、つくづく情無くなります。」

すると三人の子供が一匹の豚をひきすりまはしてゐる。よく見ると、それは叔母の言つた今度の乳母であつた。

誰か眠つてゐるなど、ぼんやり藤吉は感じてゐる。

(もう二十年もつこの昔だ。)

彼の幼な心は甘やかされてちつと胸に抱かれたまゝ見上る。奇麗に通つた鼻すぢが、やや浅黒く光つて、その上から涙にうるんだ目が可愛くて可愛くてたまらないといふ風に見下してゐる。と、彼の目もぼうとかすんできて、唯夢中に懷に顔をうづめる。かすかな唇の暖かさがいくつも襟に感ぜられると間もなく、彼の女の身体から發する溫味がすつかり

彼をつゝんでしまふ。くくくく……………

どうとう彼は泣き出す。

しかし氣が付いて見ると、彼は藤吉自身でないやうでもある。

生れてまだ一と月にならない藤吉は、目をきよろりとさせて、徒らに新しい世界を觀究めようとする。が、すぐに空腹が、世界はそんな所がないことを告げる。乳房は赤くなるほど吸はれる。彼の女は、自分の乳がもう渴れかけてゐることを知つて悲しさうに藤吉を愛撫する。

二十年もつこの昔のことだ。藤吉は、當時の中にある藤吉を考へてゐる。

「唯私は皆さんとお別れするのがつらいし、それに坊ちゃんとお別れするのは尙更いやでございます。……………こんな我儘もどうぞおしかりなく、この後も寄せて頂きたうございます。」

こんな様なことを言つて、來て三週間目位で渴れてしまつた自分の乳房をうらめしさうに、そしてあんなに別を惜みながら彼の女は去つてしまつた。その代りに來たのが、あのぶよ／＼太つて豚のやうな乳母だつたらしい。身体中乳かと思はれる位、よく乳がでた。藤吉は、この乳母について豚の如し、としか今に覺えてゐないやうだ。そいつも、どこ

かへ嫁いたと聞いたことがあるやうでもあつた。

すると、断片的な背景がとでも、はつきりして來た。

前は開けて野になつてゐる。野は少しむかふで海に變つてゐる。浪があるといふことは知つてゐるが、ちつとも見えない。一筋の道がどこまでも續いて、海は煙つてゐるらしい。

と道に當つて、たくましい乳房が見える。からだは豚らしい。いくら仰いでも、藤吉には胸までしか見えない。

「私はこんど、ちよびつと、おめでたいのですよ。」

と、聲がしたかと思ふと、例の乳房だ。

この豚の様な乳房は八年も藤吉の家になつたのだ。

「ね、お目出度いのですよ。」

亦言つた。

三四百の金をためこんだのだ。長持一雙。それにつまるだけの着物も、もう集められてあつたのだ。

すると、あいつは八年も家にゐたのだな、八年も——はつきり八年と藤吉は感ずる。豚も油斷がならぬわいと、藤吉は思つてゐる。

「それぢや、行きますわな」

手車に財産一式を積み上げた豚さんは、にこりとし乍ら、がらがらとそれを自分でひいて行く。もう海も野もない。道だけが、見える。が、そのあとから、また違つた景色が浮ぶ。停車場の構内らしい。そこは、うつとり陽が陰つてゐるやうだ。

「坊ちゃん、坊ちゃん、大きくおなりあそばせ。乳房はあやはきつと會ひに來ますから」
彼の女は彼をだきしめる。

若い女だな、と考へる。

お、先の乳房だ。すると彼女の女は一匹の鹿になつてひよいと、とび去る。

——鹿のやうな女だつたな——と考へ考へするが、當時生後二ヶ月の藤吉はその顔を知らないわけである。

「でも奥さん、お喜び下さい。うちのは却々働き手ですから、夜もめつたに家に寝るなんて暇がありません。」

さう言ふのは、三人も小供のある所へいつたといふ、叔母んとこの先の乳房である。が確かに、うちに居た豚さんでもある。

さう言つて二重人格者が歸つて行く。

(もう大分前のことだ——そんな氣もする。)

「それは、ちやんとお妾さんがゐるからだわ。あれはちつと馬鹿の様だつたから、氣がつかないのよ。夜もうちにゐない程いそがしいなんて。おかしいわ!」

叔母の聲だ。聲は、おかしさうだが、顔を見ると、いやに不景氣さうである。

人生は時の長短なり。と顔に書いてある。これは夢ぢあない。錯覺だ、ひどい錯覺だなと感じてゐる。感じてゐるのは藤吉ではなく、確かに私だ。

「あの人も可あいさうね。」

「誰だい、何が可愛さうなものか、豚は豚らしい程嫌だい。」

私は叫んだ。

急にすべての意識がぼうとぬくもつて、眠つてたのだなといふ考へだけが、はつきりとして来る。

陽がうらうらと部屋深くさしこんでゐる。その春の陽ざしに、私はしつとり汗ばんでゐる。

——そのお妾さんは、鹿のやうな先の乳母に似てゐる。さうらしい。——

まだこんな氣持が、かすかに残つてゐる。陽はうらうらとさしこんでゐる。

「あの人も可愛相ね」

叔母の聲とも、私のきまぐれとも知れぬものが、虚空をかけ去つて行くのだ。二十年もつとの昔! 時の宣傳日!

藤吉といふのは、私の名で、藤吉は母以外の誰の乳で育つたのでもない。

豚の女も、鹿の女も、現實からはるかになつてしまつた彼の心の影である。しかし私は、獲麟に筆を絶つといふのではない。

五月の詩

瀬川重禮

五月

白か 白

君の心に似て 虚

空に映つる君の微笑

五月

草の上になれて

何思ふこゝちなし

風

一株の草

白く笑ふ

風の笑

風には風の心がある

晝餉どき

本 林 綱 治

懣ひを報ずるサイレンが
 明るい大空に 高 高と響く。
 地上を 隙間から隙間を
 さらさらと流れた朝の太陽も
 今は たつぷり 溢れて
 白い静けさに聲をひそめた。

道ばたに 赤くやけて
 わき目もふらず働く人達も
 一勢に腰をたゝいて背を伸ばした。
 生命の休戦ラッパが鳴る。

正午！

私も 午後のわづらひまでの暫時を
 ゆつくり 新聞でも読みながら
 御飯を戴かう。

十四年五月

鼻の缺けた石膏細工

脇山康之助

彼の生命の糧は
鼻の缺けた石膏細工

三度目の苦心が
こんな立派な手際好さに
都會の姿が
鮮明ださうだ。

じつさして居るさ
煤けた石膏に

都會の煤煙が踏るさうな
然も失はれた鼻から
都會の歡喜が噴出すさうだ。
正視した私には解らなかつた。
然し彼は端正に主張した。

故郷

藤田義藏

わたしの故郷はさびれた城下町だ
色あせた城をさりまいて凡てが眠つてゐる

どんよりしたゝえた壕には
なかばくづれた城壁の影が動かうもしない

休暇に都會から歸省するこ

ごんなに都會の騒きに心が亂れてゐても

古城は黙つて迎へてくれる

そして平和な懷に抱いてくれる

凡ては平和に満足してゐる

昔の友達に結婚してゐても

私を昔の言葉で呼んでくれる

私は毎日昔話をして暮す

休暇が終はるこ

私は再び都會へ旅立つて来る

えらくなつて歸るぞと叫ぶこ

古城は矢張りやさしく見送つてくれる

畫家

加藤 一雄

オィお前

明日は早くやつておいでよ

たつた今お前は

左様ならさ歸つたばかりなのに

もう俺は變な自惚が出て来るぜ

カンザアスの上に残した

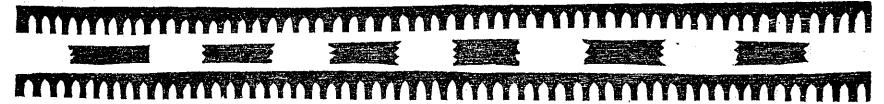
お前の影にすぎないんだが

センチメンタルな民衆に

たゞきつけてやる繪なんだがナ

それにお前が歸つた後で

斯うしてカンザアスの前に立つさ



駄目だ、駄目だ、
俺は矢張り感激して了ふんだぜ
早く明日が来るさ、いゝんだ
そして俺の感激をブチ破つて了ふさ、いゝ
こんなものは民衆のお前なんだ
ほんさうの俺のお前は
モデル台にうづくまつてゐる
豹の様なお前なんだ
ネー、こんなものは二人で展覽會に
たゝき賣つて了はうよ！
俺は繪描きが商賣なんだからな。
さにかく
早く明日が来るさ、いゝ
するさ、ルビーの指環をキラツき光らせて
お前は着物を脱ぐんだなあ。

大正十四年春

いてふの丘——一幕——

坂田 精一

古。

若者

いてふの丘の

姉妹

老爺

いてふの丘。

黄葉散亂

下に小川

妹、川邊に。

姉、丘の公孫樹の下にて籠を手に妹の方を見て居る。

籠を樹にかけておりて来る。

妹。おまへなにして居るの。

姉。おまへなにして居るの。
(びつくりして) 姉、姉 妾洗物をして居たの。この甕をぐらんなさい。新珠のやうに
光つたでせう。この小ひさい方は白魚の腹のやうに。

姉。そんなことを聞いて居るのではありません。いま何をしておいでだつたと言ふので
す。

妹。そのほかに妾なにして居たらう。

姉。おまへ、いま水の中を一生懸命のぞいて居たぢやないか。

妹。え、姉、妾いまあの繁縷草の間を糸のやうに縫ふ水澄虫を見て居たの。

姉。うそをおつき。

妹。――。

姉。おまへいま自分の顔を水に寫しておいでだらう。

妹。いゝえ 姉。

姉。そして笑つて見たり、口をつぼめて見たり 淫らに白い齒を出したり。

妹。うそ。うそ。

姉。妾見て居たの。さつきから見て居たの。

妹。うそよ。うそよ。

姉、妹のそばへよる。

姉。おや。べに皿。こんなものを持ち出して。

妹。いえ。いえ。

姉。この子、おかしい子ね。どれ唇をお見せ。(手をかけやうとする)
なにするんです。

(むつきしたやうに) いぢわる。

妹。洗物にかゝる。

姉。黙つてにらんだまゝ立つて居る。

無言。

姉やがて籠をさりに丘へ上る。

夕映

黄葉散る。

小弓を持つた若者丘に登場。

若者。あゝ（姉を見てあはてたやうにおちぎする）

姉。ごなたです。

若者。となり村の若者です。私の家は丁度あの森の向ふにあたります。

私はあなたが此の丘の持主であることを知つて居ます。

姉。妾はあなたがなんであるか知りませんよ。

若者。あなたはお腹だちなのですか。私が此の丘へ無斷で小鳥をうちに來たのをおいかり

なのでせうか。

姉。（無言）

私は弓をよく射ます。昨日私は飛んで居るはいたかを落しました。そして今日私は

この丘へ來る路で。

姉。あなたはいつも此の邊にお見えになりますね。しかもきまつて夕暮時に。

若者。さうです。この丘の美さがどれだけ私を惹きつけるでせう。

姉。ほゝゝ。こんな丘が美しいなんて。

若者。私は美と言ふものがどう言ふものであるか知つて居ます。

姉。さうですか。こんな丘のどこが美しいのでせう。

若者。（少しむつきして）どこが美しいかと聞かれてもお答出來ません。たゞ感ずる事が出來

るだけですから。

姉、公孫樹の果を拾ふ。

黄葉散亂

姉。（獨白）よくまあしきり無しに散ること。

若者。公孫樹の實をお拾ひなんですね。あゝたくさんつて居ますね。黄玉のやうに美し

い實がたくさんつて居ます。

（獨白）まあ、黄玉だなんて。おかげで妾の手がこんなにかぶれて失つたのに。

姉。あなたまだそこに居らつしやるの。

若者。

なにかご用があるの。

若者。

姉。歸つて下さい。あなたのおいになる場所ではありません。

若者。なせです。

姉。此處は私の丘です。それに村人の口がうるさいからです。公孫樹の丘の娘はいまま

でそんな噂を微塵もたてられた事はありません。

若者。

あ。私はなせあなたを腹だっせたかわかりました。私があまりぶしつけであつたのが悪かつたのでした。しかしご安心なさい。私は悪者ではありません。

姉。

あなたは悪者です。

若者。

悪者？　どうしてあなたはそんなことを仰るのです。

妹、川邊にて先刻から丘の方を注視して居る。

姉。

悪者ですとも。私は今日きつぱりあなたに言ひます。妹はまだほんのねんねいですが、あの娘に詰らないことを言はないやうにして下さい。

若者。

え（昂奮しながら黙る）

妹。

姉。姉。（たまりかねたやうに丘へ）

姉。

あつちへ行つておいで。

よく言つておきます。もうこの丘をうろつくのをやめて下さい。

若者。

（黙然）

妹。

姉。姉。

姉。

あつちへ行つておいでなさい。

なにも知らない子に姉の目をかすめるやうなことを教へないで下さいよ。

若者。

あなたの仰ることがわかりました。しかし私は悪者ではありません。

姉。

誰も自分のことを悪者とは言ひませんよ。

若者。

私は男です。力にみちた若者です。希望が私を導いて居ます。私にはほこりがあります。私は自分の身がどう言ふものであるかよく知つて居ます。自ら自分をけがすやうなことはしやうとは思ひません。

姉。

（黙つていてふの實をひるふ）

若者。

不幸にして私には父がありません。が私には善良な母があります。私は善良な母の子です。私は今まで人に悪者よばはりをされたことはありません。

あなたが女でなかつたら、力にみちた男であつたらどんな強い男であらうとも私はすぐ倒して失つたでせう。

姉。

ほゝ。さうですか。それなら私にも言分いひぶんがありますよ。あれには父母がありませんがこの妾がついております。父母のない娘はふしだらだなどと言はれたくありませんからね。亡い父母にたいして濟すまないことです。また姉として責任があります。私はあの方かたにいつだつて詰らないことを話した覚えはありません。たゞ、自然の美と言ふやうなことにについて話しました。その日の愉快な勇しい出来事について語つただけです。

若者。

姉。

男の方かたはみな初はそんなことを言ひます。しかし、とりかへしがつかなくなつた時に別の口をきゝますよ。

妹。

姉、姉。

姉。

(ふりむく)

妹。

そんな詰らぬことを

姉。

(きつとして) 何がです。なにが詰らないの。

妹。

よけいな心配をしないで下さい。

姉。

黙つておいで。おまへはなにも知らないんだから。

妹。

(捨臺詞) あまり姉ぶつたことをしないが宜い。

姉。

(瞬間けはしく妹をにらむ)

おまへには後で言ふことがあります。

若者。

(腕で目をこする)

私は歸ります。

姉。

さう。歸つて下さい。お願いします。

若者無言でえしやくする。退場。

夕映うすらぐ。

黄葉散る

姉。

おまへお父さん、お母さんのお墓の前であんな口がきけるかへ。

妹。

(無言)

姉。

日頃にない口をおきゝだつたね。

妹。

知らない。(姉に背をむけうづくまる)

姉。

あの男。偉さうなことを言つてなんだかわかるものか。私は弓が上手です。ふん。

たくはありません。けれども、おまへがすなほでないからいけないのです。私がおまへにものをたづねるのが何故わるいのです。私はいつおまへに話されないやうなことをして。

(無言)

私たちはお父さんお母さんのない不幸な境涯なのです。私は決心したのよ。おまへが一人前になるまで獨身で居やうと。お父さんお母さんのお墓を守つて一生丘の娘で朽ちてもかまわない。

お前が一人前になればおまへの爲にも考があります。その時の用意にと思つて、人普な蓄をしておくために私は丘で働いて居るのです。

(無言)

おまへは母さんがいまわに仰つたやうにすなほでなければならぬのです。

(泣きながら) わたしは小さい時から姉の言ふことを何でもきいて來ました。

さつきは如何。あの男の居る前で。

だから。だから。妹だつて認める時は認めて貰はなければならぬのです。それを。それを。姉はわたしに恥をかゝせるんです。

姉。妹。

妹。

姉。

妹。

姉。

妹。

妹、すゝり泣く。

姉。

妹。

おまへはあの男の前をかざりたいの。姉にたてをついてまで。

あのかたは立派なかなだわ。姉があんなことを言ふなんて。あのかたはきつと私たちをぶつなすつたにちがひない。

おまへ何時からあの人と知り合になつたのです。

(無言)

この前、あの人と一共にこの川の上に居たね。

居たつて宜いぢやないの。あの人魚を釣るのを見て居たんだもの。

妹。よく知つておいで。

(無言)

姉。妹。

男には男のほこりがあります。女には女のほこりがあります。男のほこりは力です。

その中にはつる草のやうに手をのばす征服力がひそんで居ることを知らなければなりませんよ。

(無言)

姉。妹。

この村里で身のしまつに困つて狂ひ死にをした女のことを考へてごらん。そして私

だちが今までいてふの丘を守りながら村人から可愛がられ父母の時代のやうに尊敬されて来たわけを考へてごらん。少くとも女は素養が出来るまではほこりを保たなければなりません。氣位を保たなければなりません。小草のうちに凋んで失つてはいけません。小草のうちに凋んで失つた女がつる草のやうな男の心をとらへてゆけると思つたらまちがひです。捨てられたとて誰を怨んで見やうもないのです。自分のあさはかさを恥ぢるより。

(つまたちがゐる)

どこへ行くんです。

(無言)

まぢめで話して居るんですよ。

(黙つて去らんす)

おまち。

いやです。

なせいやなの。

姉は。姉は。餘計なことばかりするんだから。

妹。

姉。

妹。

姉。

妹。

姉。

妹。

姉。

妹。

姉。

妹。

姉。

妹。

おまへがまだ子供だからよ。
世話やき。

妹。

なにするんです。

姉。

いやです。いやです。そんないてふかぶれのした手で。
みんな誰のためです。

妹、ふり放さうとする。

姉、妹をひき止める。

妹、泣き乍らむしやぶりつく。

妹。

姉。

妹。

姉。

妹。

！(籠の中のいてふの實をつかむや妹の顔に投げつける)。
あつ。(仰山な聲でなき出す)
(にらんだまゝ立つ)
なにを言ふんです。

妹。(泣く)

姉。なにを言ふんです。不貞くさつて。

妹。(泣く)

陽入る。

黄葉散る

姉。(妹を起さうとする)

妹。いやです。いやです。(泣く)

姉。いつまでも、さうして居るが宜い。

姉、籠をもつて丘を下る。

(退場)

若者。現る。(妹の前に弓をなき膝まづく)

若者。私です。

妹。(泣く)

若者。私です。

妹。(顔をあげる)あ。

若者。泣かないで下さい。

先刻私はすぐ家へ歸らうと思ひました。歸つた方が宜いと思つたのです。があんな誤解をうけた残念さと當分あなたにお目にかゝれない殘惜さに樹影に思案して居るうちに、あなたの泣聲が聞えたやうに思つたので來て見たのです。

姉があなたにあんな事を言ふなんて。わたし姉の見て居る前で川へでもとび込んでやらうかと思ひました。

若者。(笑ひながら)なにを仰るんです。あなたの姉さんはしつかりした方です。私は姉さんに睨まれた時すくんで失ふやうな氣がしましたよ。

妹。けれども。けれども。姉は姉ぶつて餘計なことばかりするんだわ。

若者。そんな話を止ませう。

妹。あなた。さつき仰つたやうに本當にお父さんがないの。

若者。ありません。私がまだ幼い時です。父は村へ流れて來た歌女と共に母と私を残して何處かへ行つて失つたのです。母は私を抱いて苦み通して來たのです。

妹。わたし。お父さんの顔なんか知らないの。お母さんは私がちひさい時死んだの。けれども。あなたには立派な姉さんがついて居ます。私に善良な母があるやうに。

妹。あなたのお母さんは、わたしのやうな者をお嫌にならないかしら。

若者。私の母は生活に疲れて居ます。母は意地を通して私を育てるために苦んで來ました。けれども今では疲れ切つて居るのです。子供の力を認めて居ます。母は私の事に干渉する丈の力も無いのです。親ぶつて自分の思ふ女を子供におしついたりするだけの力もないのです。私があなたを妻にしたいと言へば母は喜んでうなづくだけです。

妹。

若者。私が手をのべれば母は私の手にすがるので。私が『こゝに溝みぞがありますよ』と教へれば『さうかへ』と言つて私に手をさし出すのです。

けれ共私は母が好きです。乳房をふくませて呉れた母を想ふより働いて私に着物をきせて呉れた母よりも私の前に黙つて手をさし出す母が好きです。だきしめたい位なつかしいのです。

若い者は自分の力を認めて呉れるものを好くのです。

妹。私の姉はわたしを頭から子供あつかひにするの。わたしは姉の言ふことは無理でもきいて來ました。無理をきいて居ると姉は喜んで居ります。けれども。

若者。

姉さんは緊張して居るんですよ。あなたを抱へておせば涙がしみ出す位緊張して居るんですよ。私にもそんな氣持がわかります。

私が小さい時でした。母は生活の費を作るために他人ひとの着物を縫ふんです。ある日、母は仕事をしながら頭痛のため餘程苦しさうでした。母は私にその戸を閉めよと言ふんです。私はいやだと言ひました。その戸と言ふのは私の所から二歩であるから母の所からは三歩しかないんです。母が自分で閉めやうと思つたら自分であるにわけの無いことなのです。けれども母は私に閉めよと言ふんです。私はいやだと言つたんです。私はふと母の顔を見たら母の目に涙がうかんで居るんです。私は悲しくなつてもう少しで大聲をあげて泣く所でした。

あなたの姉さんの氣持もわかるやうな氣がします。あなたを抱えて緊張し切つて居るんです。だから時々むりを言ふのです。親が子供に甘へるのです。姉が妹に甘へるのです。

妹。

若者。

さうです。ごこの親を見たつて親は親ぶります。姉は姉ぶります。ぶらせておけば喜んで居ります。親は子を姉は妹を自分では愛の殻で一心におし包んで居る算りな

のですからね。穀の中の實は芽生へると穀をはぢきかへします。生長するものは自分の力の自由を欲するからです。愛する者と愛せらるゝ者の間に淋しい葛藤が初ります。そして新しい芽がのび切つた時に古い葉は散つてゆくのです。

若い者はよく考へております。親が考へるやうにいつ迄も子供ではないのです。親の愛の掌は吾々の目からは憐憫なのです。

妹。

え。少し先に生れて來たからつて姉ぶるのも笑止ですわ。

若者。

けれどもそれがその人達の生命なんですよ。ぶることが生命なんです。ぶることが出來なくなつた時にその人達には淋しい自覺が來るのです。

此の晩秋の落葉のやうに黙つて散つて行かねばならぬ時を考へるのです。

若者。

あ。誰か來るやうです。

私は歸ります。急いで母の所へ。

さやうなら。さやうなら。

また會ひませうね。

若者急いで退場。

白髯の老爺登場。肩に袋をかつぐ。

丘にのぼる。

老。

ひめ。そこにおいでか。

妹。

(無言)

姉さまが言ふて居りましたぞ。早う家へ入るが宜い。さき程から夕飯のしたくをして待つておいでだ。

老。妹。

妾いゝの。ごはんなんか欲しくない。

はつはつはつはつ。なんの、姉さまに叱られた位そんなに悲しまないでも好いのだ。今年もいてふの實がたんとなつた。いま家によつて姉さまにこんなに貰つて來た。婆さんへのみやげだと言つてこんな見事な瓜もくれた。

よう葉が散つたな。ひめ。爺がひめを負ひながら落葉焼をしたのを覺えておいでか。

(無言)

老。妹。

ひめ。なにが悲しいのぢや。もう日が暮れますぞ。爺はいそぐので折角姉さまが夕飯にどめて呉れるのをこわつて來たのぢや。

あんな氣だてのよい姉さまに世話をやかせるものではない。あの年になつて白もの一つつけるではない。よく働く。しつかり者だ。村人はみな感心して居る。それに

丘の姉妹は仲が宜いつてだれだつてはめて居ますぞ。
仲よくするのぢや。

妹。

(無言)

姉さまにも言^ミづけて來たが明日はほんとに來ておくれ。二人で招^よばれて來ておくれ。婆さんがひめ達の顔を見たいつてどんなに待つて居ることか。

明日はそれはく賑ふのぢや。宮司^{みやつかさ}だちが唐獅子の面をかぶつて舞ふのぢや。今晚のうちに都からのお使者^{つかひ}を乗せた驛馬^{えきば}が着くのぢや。

さあ。ひめ。立つて塵をはらふが宜い。これ。ひめ。

妹。

いやです。

老。

はて、どうしたことだ。

姉、丘の下に來て見て居る。

姉。

爺。かまわないでおきなさいよ。

老。

お。姉さまだ。

姉。

いつまでも強情をはつて居るが宜い。

老。

姉さまに叱られないうちに。さあ。ひめ。

これ。爺は歸りますぞ。

爺、快活に笑ふ。退場。

姉。黙つて丘の下に立つて居る。

やがて川邊に下り妹の洗つたものを籠に入れ
それなかへて丘に上り來る。

姉。

妹。

妹。

(無言)

姉。

どうしたの。ごはんです。

妹。

(無言)

姉。

たべるの？。

妹。

(頭をふる)

姉。

さう。ぢや片づけるから宜い。

姉。

(沈黙の後) 妹、なせ強情をはるんです。

氣にさわつたからと言つて妾を苦しめるつもりなの。

姉。だから子供だと言ふんです。妾の言ふことが五月蠅いければ一生、口もきくません。

けれども、そんなことが出来ると思ふの？

妹。
(無言)

姉。さあ、人が來ますよ。考へることがあるなら家に入つたつて出來ます。

妹。
(うなづく)

姉。さう。ぢや立つて。

妹。もうおそいんだよ。

姉。さあ顔を洗つておいで。

(妹たち上る)

姉。(草履をそろへてやり乍ら) おまへ、あまり強情なんなもの。

妹。(急にしゃくり上げながら) 姉は。姉は。

わたしの顔にいてふの實なんてぶつつけて。

姉。ぶつつけたんぢやないよ。運悪くあたつたんぢやないの。

(後から)

誰にもそんなこと言ふんぢやないよ。なにもあてる氣でしたんぢやないからね。

妹。黙つて川に下りてゆく。

姉。籠をこわきにして立つ。

黄葉散亂

(幕)

六號雜誌

前號に於てふさした手違ひから學校からの依頼の一部を果し得なかつたことをお詫します。

今後充分の責任をもちます。色々雑誌に對する御希望注文を知らせて戴きたい。

締切を少し早くしたせいか例のやうな狼狽かたをしないですんだ。

樫村が力んだのか茶目つたのか揭示に「自信のある作を」とやつたさうである。夫子自ら自信のある作を載せ得たか如何かたづけて見るが好い。奴さん言ふに違ひない。

「次號まで待つて居る。ぐすく言ふまでつ腹蹴やぶるぞ」

お互に大いこまは言はれないのである。毎度ながら次號を期待して欲しい。良い作品をうんこ寄せて戴きたい。

小説が十五篇程集つた。一二思ひ切つて割愛した分もある。原稿は一先づお返します。

一年の人から作品が殆んど出なかつたのは如何したこまか。誰か一人位さび出すと思つて居たが裏切られた。

お互に寄り合つて勉強して居ります。讀んだり書いたり貶し合つたりその隙々に頭を並べてのゴシップは愉快なものである。

鯉になるか、鮪になるか、こに角蛙にだけはなりたくないものである。

○ 次號には部報が集ること、思ふ。選手諸君にうんこ紙上を飾つて貰はなくてはならない。(精一記)

× ペメントの言葉

× 載せるべき作品に赤いインキを染め終る。

ホッとする。

心ゆく迄、バットをのみ込む。

すると、急に氣分が暗くなる。

× 今度も亦こんな過程を繰り返した。

× 見渡せば又皆んなから影口をきかればならぬ顔ぶれになつて了つた。

一年は春さ、夏さ、秋さそして、冬さ定めてゐるのでは、更々ないのに。

『限りある紙數 』は決して私達の武器ではない。

× 揭示の「成るべく自信あるもの」が、思はぬ迄、矢おもてに立つた様だ。

何もチエホフやドストイェフスキを皆に望む程、私も愚かではない答だ。

だが 「詩人は限りなく虚榮に富んでゐます」といふニイチエの言葉は、あながち私達にも無關係ではなさ相だ。

「現代は野人を要求する」とは、あるフランスの小説家の信念だ。

最後に、

さんだ意味の取り違へから

「雑誌部」と「去勢」に何か因果關係を見出した様な人が居るらしい。

自分等の學校が勝つて喜ばない者があると思ひますか？

× ところで、

「詭辯の代りに生活が這入つて來た。」

こは六十年前に云はれた文句だ相だ。

×

又 雑誌部の主催で、十一月に繪畫展覽會があります。

好い出品が澤山集らんことを希望します。

— みのる —

大正十三年度北辰會費收入支出決算書 △印八朱

科目	目	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	殘額
第一款 經常收入		六,三〇〇.〇〇〇	六,三九六.六八〇			九六.六八〇
第一項 特別會計寄附		五,一〇〇.〇〇〇	五,〇〇〇.〇〇〇			〇
第二項 通常會員會費		四,九三三.〇〇〇	四,九三三.〇〇〇			〇
第三項 預金會金		七六六.〇〇〇	七六六.〇〇〇			〇
第四項 預金利息		七六六.〇〇〇	七六六.〇〇〇			〇
第二款 用途指定寄附金		一〇〇.〇〇〇	一〇〇.〇〇〇			〇
第一項 特別會員用途指定寄附金		一〇〇.〇〇〇	一〇〇.〇〇〇			〇
第三款 永久資金收入		八三三.〇〇〇	八三七.〇〇〇			四.〇〇〇
第一項 通常會員永久資金收入		八三三.〇〇〇	八三七.〇〇〇			四.〇〇〇
第四款 臨時支		七,三三三.〇〇〇	七,三三三.〇〇〇			〇
收入合計		五,〇〇〇.〇〇〇	四,八七六.六八〇	一八六.三二〇		一三三.六八〇
第一款 經常支出		二〇.〇〇〇	八四四.四四〇	四四四.四四〇		〇
第一項 講演費		一〇.〇〇〇	一〇.〇〇〇			〇
第二項 音樂費		一〇.〇〇〇	一〇.〇〇〇			〇
第三項 雜誌費		六六六.〇〇〇	六六六.〇〇〇			〇
第四項 弓術費		一七七.〇〇〇	一六六.〇〇〇	一一一.〇〇〇		〇
第五項 劍道費		二四〇.〇〇〇	二四〇.〇〇〇			〇
第六項 柔道費		二五〇.〇〇〇	二五〇.〇〇〇			〇
第七項 野球費		四九二.〇〇〇	四九二.〇〇〇			〇
第八項 庭球費		三三三.〇〇〇	三三三.〇〇〇			〇
第九項 旅行費		一三三.〇〇〇	一三三.〇〇〇			〇
第十項 漕艇費		四七六.〇〇〇	四七六.〇〇〇		五五五.〇〇〇	〇.〇〇〇

第十一項 競技部費	二七三.〇〇〇	二七三.七六〇	〇.七六〇	〇	〇	〇
第十二項 特別大會費	二二一.〇〇〇	二二六.六八〇	五.六八〇	〇	〇	五.六八〇
第十三項 春季運動會費	一〇三.〇〇〇	一一〇.二九〇	七.二九〇	〇	〇	〇
第十四項 秋季運動會費	三六六.〇〇〇	三一一.六六〇	五四.三四〇	〇	〇	〇
第十五項 會務費	三九〇.〇〇〇	三九〇.二九〇	〇.二九〇	〇	〇	〇
第十六項 各部賞品費	二五〇.〇〇〇	一九一.一〇〇	五九.九〇〇	〇	〇	〇
第二款 豫備金	四一〇.〇〇〇	〇	〇	二五〇.〇〇〇	〇	一六〇.〇〇〇
第三款 積立金	三三三.〇〇〇	三三三.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
第一項 野球場修金	四一〇.〇〇〇	四一〇.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
第二項 庭球場修金	四〇.〇〇〇	四〇.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
第三項 端艇新造積立金	二五〇.〇〇〇	二五〇.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
第四款 用途指定金	一四〇.〇〇〇	一七一.三三〇	二七.三三〇	〇	〇	二七.三三〇
第一項 運動會用器	一四〇.〇〇〇	一七一.三三〇	二七.三三〇	〇	〇	二七.三三〇
第五款 永久資金積立金	八三三.〇〇〇	八三三.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
第六款 臨時支	五五五.〇〇〇	五五五.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
第一項 旅行費	七七.〇〇〇	七七.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
第二項 劍道費	八二.〇〇〇	八二.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
第三項 漕艇費	八五.〇〇〇	九〇.五五〇	五.五五〇	〇	〇	〇
第四項 庭球費	三六.〇〇〇	三六.八〇〇	八〇.〇〇〇	〇	〇	〇
第五項 競技部費	一九〇.〇〇〇	一八.九六〇	一七一.〇四〇	〇	〇	〇
第六項 資金返還	二五〇.〇〇〇	二五〇.〇〇〇	〇	〇	〇	〇
支出合計	七,三三三.〇〇〇	六,六六六.九六〇	六六六.〇四〇	〇	〇	六六六.〇四〇

大正十四年十二月三日